

青森県埋蔵文化財調査報告書 第253集

下馬坂遺跡

—国道338号道路改良事業に伴う遺跡発掘調査報告—

1999年3月

青森県教育委員会

序

東通村には、物見台遺跡、念仏間遺跡、浜通遺跡をはじめ数多くの埋蔵文化財が包蔵されております。

青森県教育委員会では、国道338号道路改良事業に伴い、工事予定地内に所在する東通村下馬坂遺跡の発掘調査を行いました。調査の結果、縄文時代の土器、石器が出土しました。

この発掘調査の成果が今後の埋蔵文化財の保護と活用に役立つことがあれば幸いです。

最後に、平素より埋蔵文化財の保護に対してご理解を賜っている建設省・青森県土木部並びに東通村教育委員会と発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導、ご協力を賜った関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

青森県教育委員会

教育長 松 森 永 祐

例 言

- 1 本報告書は、青森県教育委員会が平成9年度に実施した国道338号道路改良事業に伴う下馬坂遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 この遺跡は、平成10年3月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に、遺跡番号54045として登録されている。
- 3 本報告書に掲載した地形図（遺跡位置図）は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図を複写して使用した。
- 4 石器の石質鑑定は、八戸市文化財保護審議委員 松山 力氏に依頼した。
- 5 土層等の色調観察には、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄 1993）を用いた。
- 6 挿図及び遺物写真の縮尺は、各図・写真ごとにスケール等を付した。
- 7 挿図に付した北の方位は、座標北である。
- 8 遺物写真の個々の遺物番号は、挿図番号と一致する。（図－番号）
- 9 遺物には観察表・計測値を付し、出土位置、諸特徴を一覧できるようにした。
なお、計測値の（ ）は、残存値を表している。
- 10 縄文時代の土器、石器については、次のように分類した。

[土器]		[石器]	
I 群（前期）	後葉の土器(円筒下層 d 式)	I 群（剥片石器）	1 類 石鏃
II 群（中期）	1 類 前葉の土器(円筒上層 a～b 式)		2 類 石匙
	2 類 後葉の土器(大木系土器)		3 類 石錐
III 群（後期）	1 類 初頭の土器		4 類 不定形石器
	2 類 前葉の土器(十腰内 I 式)	II 群（礫石器）	1 類 擦石・敲石・凹石
IV 群	地文の縄文のみ、無文、底部片など		2 類 砥石
		III 群（磨製石器）	1 類 磨製石斧

- 11 発掘調査における出土遺物、実測図、写真などは、現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

序

例言

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査要項	1
第2節 調査方法	2
第3節 調査経過	2
第4節 遺跡の立地と基本層序	4
第Ⅱ章 出土遺物	6
1 土器	6
2 石器	12
3 銭貨	17
第Ⅲ章 まとめ	17
引用・参考文献	17
写真図版	19
報告書抄録	26

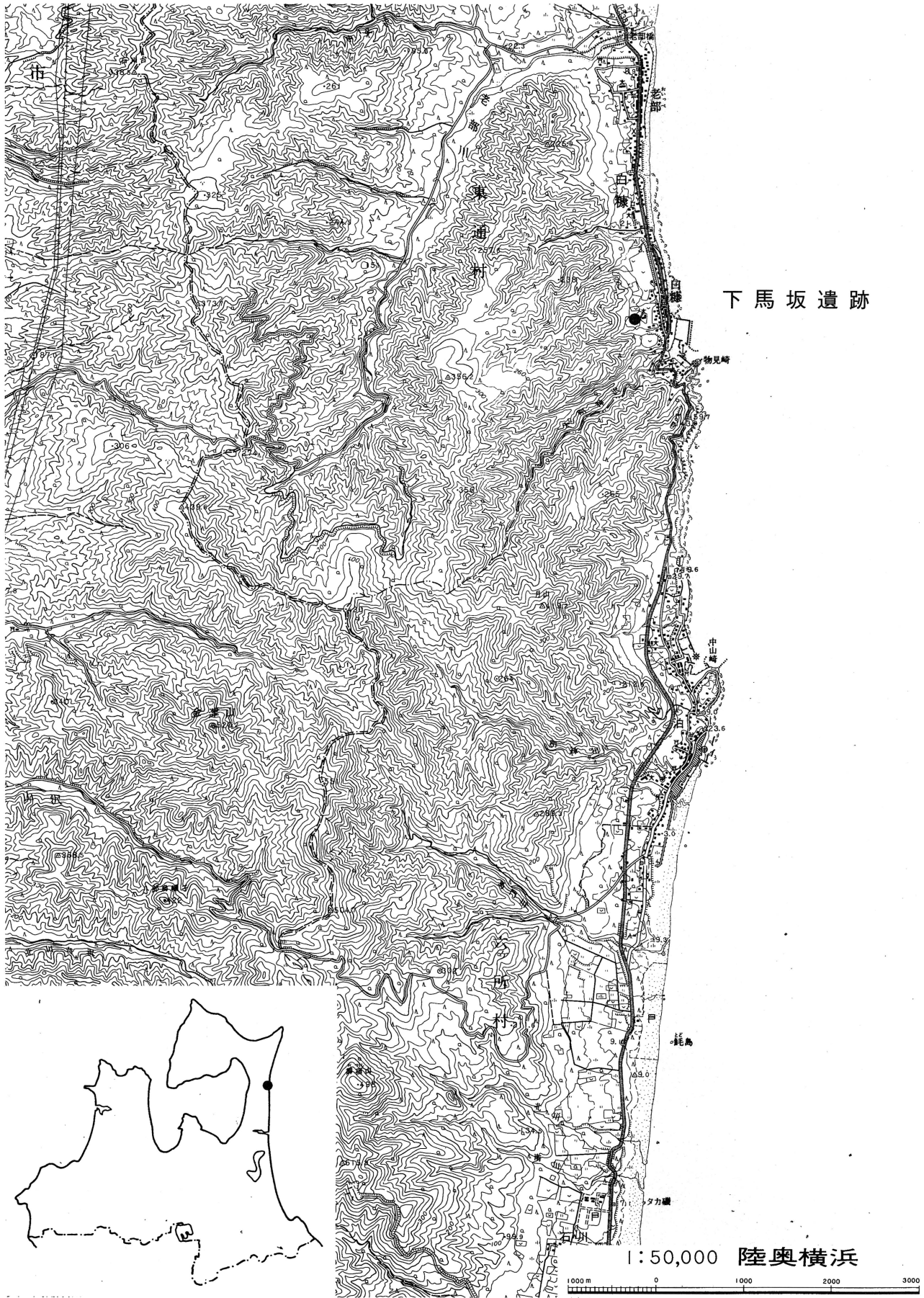


図1 遺跡位置図

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査要項

1 調査目的

国道338号道路改良事業の実施に先立ち、当該地区に所在する下馬坂遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財活用に資する。

2 調査期間

平成9年5月1日(木)から同年7月3日(木)まで

3 遺跡名及び所在地

下馬坂遺跡（青森県遺跡台帳番号 54045）

東通村大字白糠字下馬坂152-2、外

4 調査対象面積

4, 200平方メートル

5 調査委託者

青森県土木部道路建設課

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関

東通村教育委員会、下北教育事務所

9 調査参加者

調査指導員	市川 金丸	青森県考古学会会長
調査協力員	伊勢田 丞治	東通村教育委員会教育長
調査員	奈良 正義	元青森県立田名部高等学校長(地質学)
〃	葛西 励	青森短期大学助教授(考古学)
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
	調査第四課 課長	木村 鐵次郎(現、調査第三課長)
	主事	秦 光次郎(現、教育庁文化課三内丸山遺跡対策室)
	主事	三林 健一
調査補助員	福士 忠博、工藤 かおり、松浦 淳介、神 早苗	

第2節 調査方法

調査区域内におけるグリッド設定は、国土座標に合致した道路建設用中心杭が2本調査区域内に存在した（むつ土木事務所及び道路工事関係者に確認済みだが、それぞれの杭のX値・Y値は不明とのこと）ため、その1つNo.28+44.605を基準点（ⅡA-50）とし、No.28+44.605とNo.29+42.630を結ぶ南北方向の基準線をⅡAライン、No.28を通りこれに直行する東西方向の基準線を50ラインとして、4m四方のグリッドを設定した。グリッド番号は南北のⅡAラインを中心として東西軸をローマ数字とアルファベットの組み合わせで、東西の50ラインを中心として南北軸を算用数字で表し、その組み合わせで4m四方の各グリッドを南東隅の交点を呼称することで表示した。

標高は調査区域外にある工事中測量杭H=40.699mからレベル移動を行い、調査区域内に必要な応じて数箇所を設定した。

土層の名称は、基本土層については、表土から下位にローマ数字を付し、細分される土層にはさらに小文字のアルファベットを付加した。

写真撮影は適宜行うこととし、主としてモノクローム及びカラーリバーサルの2種類のフィルムを用いた。

遺物の取り上げは、グリッド単位ごとに行うこととした。

第3節 調査経過

5月1日、調査器材を現地に搬入し、プレハブ内・外の環境整備を行うと共に、調査区域内の草木除去を開始し、調査範囲の確認に努めた。

5月上旬、20mグリッドを設定し、遺構・遺物の分布を確認するための試掘トレンチを設定し、掘り下げを開始した。草木の除去中から多数の礫が見受けられたが、トレンチの深さが増すにつれ、礫の径は大きく、密度は高くなっていき、掘り下げは非常に難航した。

5月中旬、土層観察用トレンチ部分にベルトを残し、重機により調査区東側の表土を除去した。遺構確認作業を進めるが、表土直下から礫混入度の高い層が調査区のほぼ全体を覆っている為掘り下げ及び精査作業は難航した。

6月上旬、ⅡC-50からⅠS-48、ⅡC-45からⅠT-43付近にそれぞれ地形の落ち込みと思われる黒色土の広がりを確認したため、セクションベルトを設定し掘り下げていった。

6月中旬、検出遺構・出土遺物ともに少数であることから、県文化課・県埋蔵文化財調査センターの協議の結果、調査終了日が7月3日となり、それに向けて粗掘、精査を進めた。

6月下旬、重機により調査区の西側の一部の排土移動をし、精査作業を行った。調査区南側の精査作業も同時に行った。

7月2日、調査区南側の調査予定区域外の試掘を行ったところ、表土直下から縄文土器片など多量の遺物の出土があった。

7月3日、調査器材の搬出を行い、発掘調査を終了した。

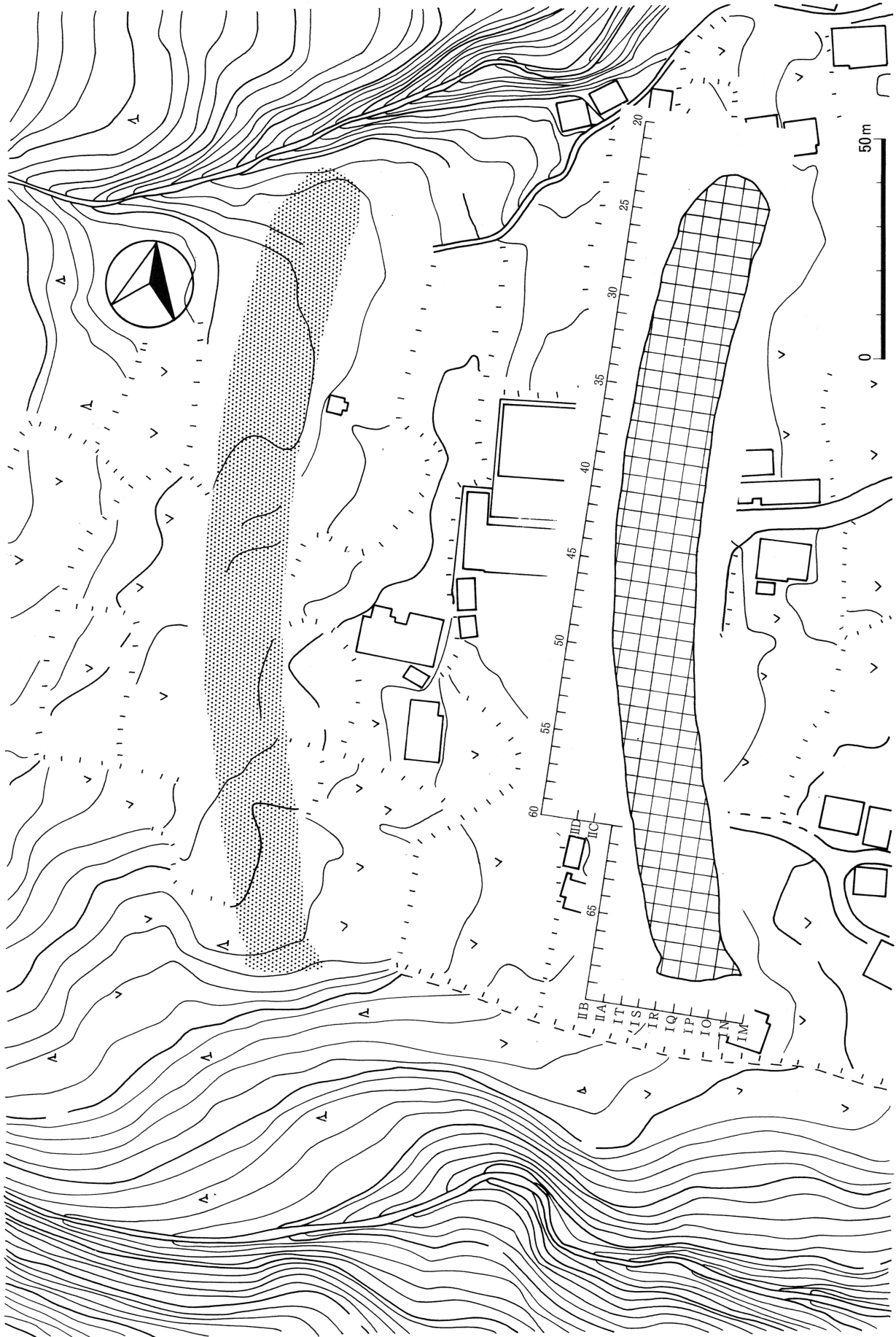


図2 調査区・グリッド配置

第4節 遺跡の立地と基本層序

(立地)

下馬坂遺跡は、標高約45mの海岸段丘上に位置する。下馬坂の名の由来が「人が馬を下りなければ、馬が坂を上がれない程の坂」であると言われていたとおり、下馬坂は白糠地区の中でも一際標高の高い位置にある。下馬坂遺跡は、そのまた山手側の白糠小学校の西方約50m、沢に挟まれた緩斜面地に所在する。

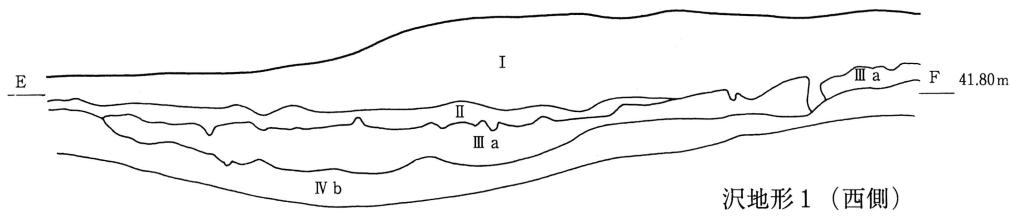
(基本層序)

調査開始直後の草木の除去中から拳大以下の礫が多数調査区内に見受けられ、表土除去後にはほぼ調査区全域に渡って無数の礫群が出たことは前述した。下馬坂遺跡の位置する海岸段丘には、山地からの転動等による崖錐性堆積物が随所に見られるとある(見知川山遺跡:1982、銅屋(1)遺跡:1983)。写真1などで見られる礫群は、本遺跡西方の泊安山岩類からなる山からの泥流質の岩塊流によってもたらされた崖錐性堆積物である。この拳大～人頭大の安山岩礫によって、火山灰層が攪乱された状態であるといえる。

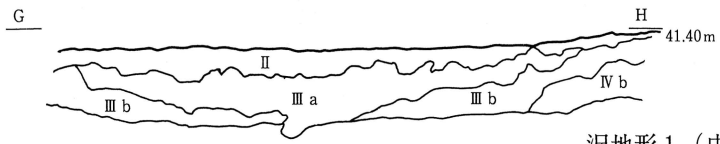
- | | | |
|--------|-------------------|--|
| I層 | 黒褐色土層(10YR2/3) | 表土。粘性、湿性に欠け、しまりがあまりない。混入している礫は粒径1～5cmの礫が主体であるが、II層近くの一部で5～10cmの礫が集中している箇所もかなりある。 |
| II層 | 黒褐色砂質土層(10YR2/2) | I層に比べ若干粘性、湿性はあるが、しまりはない。混入している礫は粒径3～5cmの礫が主体である。 |
| III a層 | 暗褐色砂質土層(10YR3/4) | 粘性、湿性、しまりはややある。混入している礫は粒径5～10cmの礫が主体である。 |
| III b層 | 暗褐色砂質土層(10YR3/4) | III a層より礫の密度が高く、礫間に火山灰土がブロック状に混入している感である。混入している礫は粒径15～20cmの礫が主体である。 |
| IV a層 | 褐色砂礫層(10YR4/4) | 粒径10cm程度の礫が主体である。III a層以下の火山灰土の中では比較的礫の混入度が低い。 |
| IV b層 | 褐色砂礫層(10YR4/6) | 粒径20～30cmの角礫が主体である。礫の密度が非常に高い。中には1辺80cmを超える礫もある。 |
| — 1 | 暗青灰色砂層(5B4/1～3/1) | 褐色土の混入はほとんどなく、水的作用による粒径約5mmの砂利層。 |
| — 2 | 褐色砂礫層(10YR4/6) | 粒径5cm程の礫が主体。IV b— 1層の間層。 |

調査区の南端に人為的な盛土が確認された。基本層序と区別するため、層番号は算用数字とする。

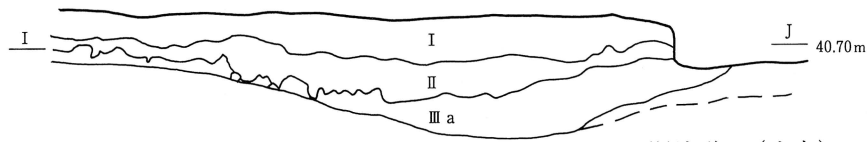
- | | | |
|----|----------------|---------------------------------------|
| 1層 | 暗褐色土層(10YR3/4) | 粘性・湿性共にややある。ローム粒20%、粒径5～10mmの礫2%混入。 |
| 2層 | 黒褐色土層(10YR2/3) | 粘性・湿性共にややあるが、しまりが少ない。ローム粒5%混入。 |
| 3層 | 暗褐色土層(10YR3/3) | 粘性・湿性・しまりがある。ローム粒10%、粒径10～20mmの礫5%混入。 |



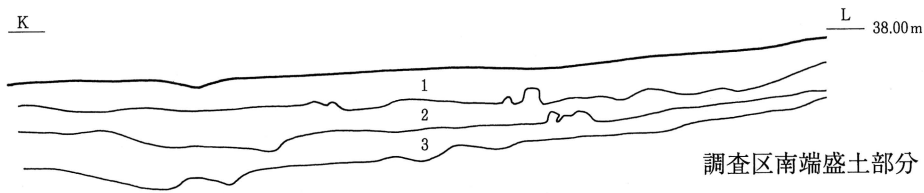
沢地形 1 (西側)



沢地形 1 (中央)



沢地形 2 (中央)



調査区南端盛土部分

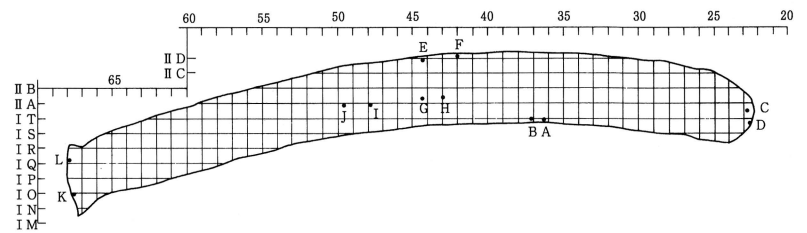
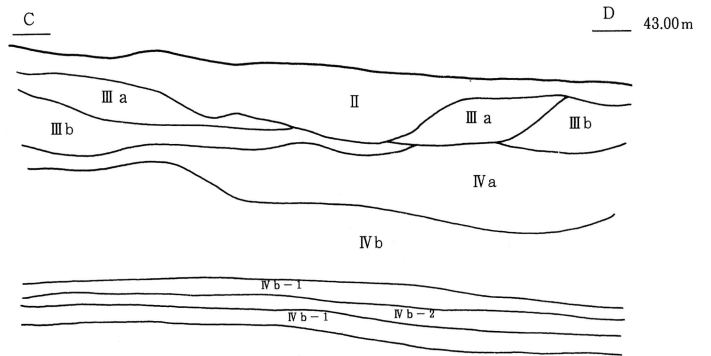
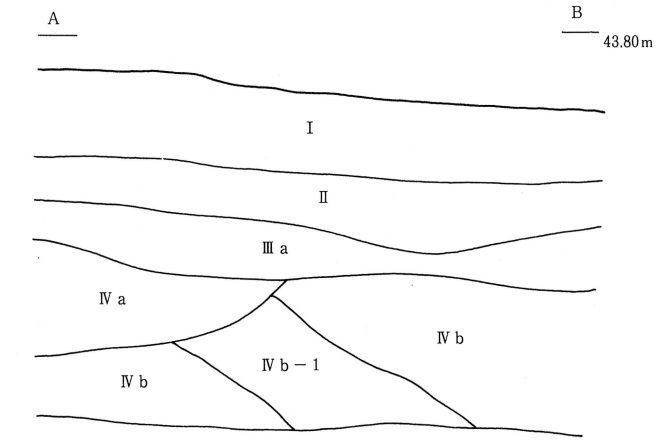


図3 基本層序

第Ⅱ章 出土遺物

縄文土器、石器、銭貨が出土した。以下、順に記す。

1 土器（図5～7、表1・2）

縄文土器は、調査区内の重量分布図（図4）から、グリッド45ライン以北からの出土はほとんどない。グリッド42～50ラインの2ヶ所の小規模な沢地形とグリッド59以南からの出土が主体であり、Ⅰ・Ⅱ層からの出土がほとんどである。

また、調査の経過の項で述べた3ヶ所の試掘トレンチからは、縄文土器・石器が多量に出土した。

Ⅰ群 円筒下層d式（1～3）

地文に羽状縄文、口縁部に縄の押圧を施している。口縁部は3片とも緩く外傾する。

Ⅱ群1類 円筒上層a・b式（4～9）

5～7は、ⅡB-45付近で比較的まとまって出土した。胎土は比較的密で、焼き締まりも良い。胎土には繊維を含まないようである。円筒上層a式に比定される。

4・8・9は、胎土に粗い砂粒を含まず、焼きも非常に良いが、断面観察から胎土が脆い感じを受ける。円筒上層b式に比定される。

Ⅱ群2類 大木系土器（10・11）

同一個体と思われる。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、波状口縁を呈す。口唇部は少し厚みをもたせた成形である。内外面ともに磨滅が著しいが、地文の縄文はRLを縦に転がしている。外面には炭化物が付着している。大木10式に並行と思われる。

Ⅲ群1類 後期初頭の土器（12～20）

12は平口縁部片で、地文の縄文に幅広のしっかりとした沈線を施している。沈線施文の際に生じた粘土のはみ出しが顕著である。内面は丁寧な調整が施されており、胎土も密で焼き締まりも良い。

17・18は同一個体と思われる。地文の縄文RLは基本的に縦転がしであるが、横、斜め転がしも部分的に行っている。沈線の幅は広いが、それほど深く明瞭ではない沈線により文様を構成している。沈線間は磨消であるが、部分的に地文の縄文が明瞭に観察できる箇所があり、それほど丁寧な磨消ではない。胎土は粗く、粒径のやや大きい砂粒を多く含むが、焼き締まりは良い。外面には炭化物が付着している。13は波頂の小さい波状口縁を呈すと思われる。口唇部外面は幅2mmで沈線状に面取りがしてある。外面の口唇部下から文様帯を構成する一番上の沈線までは、地文である縄文RLの横転がしであるが、それ以下はRLの縦転がしである。沈線間は磨消であるが、それほど丁寧には行われておらず、地文の縄文が観察できる程度の磨消である。内面は丁寧に調整が施されている。胎土はやや粗いが、焼き締まりは良い。17・18は出土地点、地文、沈線、胎土などから13と同一個体と思われる。

14は波頂部にも竹管状工具で刺突を施している。

Ⅲ群 2類 十腰内Ⅰ式の土器 (21~32、45~48、61)

細片が多く、器形・文様構成のはっきりするものはほとんどない。

縄文・無文地に円形状の粘土紐、帯状の粘土紐を貼り付けて、楕円形状などの沈線と共に文様を構成するもの (21~23、27)、無文地に楕円形状などの幅2~3mmの沈線を施文するもの (25、26、29)、無文地に蛇行状に沈線を施文しているもの (30)、無文地に幅1~2mmの浅い沈線を入組状に施文しているもの (31) などが出土した。

32、45~48は網目状の捺糸文・沈線文を施す胴部である。61は浅鉢形を呈すると思われる。外面に赤彩を施している。

Ⅳ群 地文の縄文のみ、無文、底部片など (33~44、49~60、62、63)

33はやや外傾する口縁外面に2条の幅の広いしっかりとした沈線を地文の縄文LRの上に施文している。口唇部・内面とも良く調整されている。

34の文様は網目状沈線になるかと思われるが、細片であり不明である。

35は口縁部外面が粘土の貼り付けにより肥厚している。外面は、沈線施文、櫛状工具による縦の調整を行ったのち、ナデ、またはミガキともとれる調整を行っており、器面にはやや光沢がある。胎土には粗砂粒を多量に含み、密である。36は出土地点、調整、胎土などから35と同一個体と思われる。

37は地文の縄文、胎土などから前期後葉から中期前葉にかけての胴部片と思われる。

39は口唇部約5mm幅で面取りを行っている。胴部はやや膨らみをもつ器形であると思われ、口縁部内面に帯状に炭化物が付着している。

40は外面口唇部直下に幅の狭い調整の粗い無文帯を形成している。海綿骨針を多量に含む。

41は口縁部下に若干の膨らみをもつ器形であると思われる。口唇部・内面ともしっかりと調整を施しており、胎土は非常に密である。後期初頭の範疇に入ると思われる。

38、42~44はおよそ後期中葉から後葉にかけて、十腰内Ⅲ式以降の土器片と思われるものである。

38は口唇部に粘土を貼り付けて肥厚させており、約10mm幅でしっかりと横に調整を施している。外面は縄文施文前の整形がしっかり行われていないと思われ、凹凸が若干ある。

42は口縁部を内湾させ、口縁部下から胴部にかけてはほぼ直線的な器形であると思われ、外面には炭化物が膜状に付着している。

43は口唇部・内面共に良く調整されており、やや口縁部が内湾する緩やかな波状口縁を呈す。外面は無節のLとRを交互に施文した羽状縄文である。外面の向かって右側の無文部分は、磨滅ではなくナデなどと呼ばれる横の調整である。外面のほぼ全面に煤状の炭化物が付着している。

44は口唇部を内側に折り返して肥厚させており、その痕跡が明瞭である。外面はRLとLRを交互に施文した羽状縄文である。胎土は粗で、粗砂粒を多量に含む。

49は口縁部がやや大きく外傾し、粘土紐を2条巡らしている。胎土には細砂粒を含み、磨滅が非常に著しい。

50~54は口縁部外面に成形時のものと思われる指頭圧痕のついたものである。およそ後期中葉~後

葉にかけての土器片と思われる。50・54は口唇部にやや丸みをもっており、指頭圧痕の中心間は約15mmである。指頭圧痕の下位は横方向のナデないしはケズリと呼ばれる調整である。外面の炭化物付着が著しい。51は器形が深鉢形か若干深みのある浅鉢形を呈するのか不明の破片である。また、外面の磨滅が著しいため、指頭圧痕ではなく、幅広の浅い沈線間に縦に幅広の浅い沈線を施している可能性もある。52・53は共に口縁部が肥厚しており、内面に若干の段を有するものである。52は外面に横に一段の指頭圧痕列を有し、それ以下は横方向の調整であり、53は外面に横に三段以上の指頭圧痕列を有する。

55～59、62は底部片である。55は胎土、焼成などから後期初頭かもしれない。59・60・62は後期中葉から後葉にかけての所産と思われる。63は法量の小さい略完形の土器である。胎土は非常に脆く、粗・細砂粒を多量に含む。底部の調整は丁寧であることから、器表面の荒れは磨滅によるものと思われる。

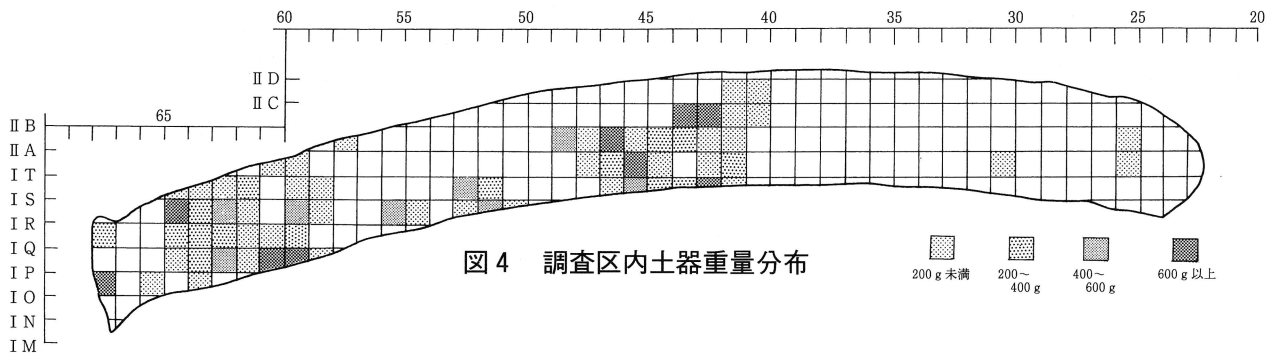


図4 調査区内土器重量分布

200g未満 200～400g 400～600g 600g以上

図	No.	出土位置	層	器形	分類	部位	文様など	備考	整理番号
5	1	試掘	—	深鉢	I	口縁	L R押圧、磨滅著しい		G057
5	2	試掘	—	深鉢	I	口縁	R ↓ 圧痕、羽状縄文 (L R, R ↓)		G060
5	3	試掘	—	深鉢	I	口縁	L R押圧、羽状縄文 (L R, R L)、外面炭化物		G059
5	4	II A-48	II	深鉢	II-1	胴部	粘土紐 (R ↓ 圧痕)		G037
5	5	II B-45	II	深鉢	II-1	口縁	波状口縁、L R圧痕、粘土紐 (L R圧痕)	5-6・7と同一	G027
5	6	II B-42	II	深鉢	II-1	口縁	波状口縁、L R圧痕、粘土紐 (L R圧痕)		G028
5	7	II B-44	II	深鉢	II-1	口縁	波状口縁の平部分、L R圧痕		G026
5	8	II A-47	II	深鉢	II-1	口縁	馬蹄状捺糸圧痕、外面炭化物、L ↓ 圧痕 粘土紐貼付、捺糸圧痕、内面ミガキ	5-9と同一か	G038
5	9	I S-47	III	深鉢	II-1	口縁	粘土紐 (L ↓ 圧痕)、馬蹄状捺糸圧痕、外面炭化物	口径：24.0cm、残存率15%	G012
5	10	II A-46	III	深鉢	II-2	口縁	沈線、内外面炭化物、R Lタテ、磨滅、波状口縁	5-11と同一か	G035
5	11	II A-46	III	深鉢	II-2	口縁	沈線、内外面炭化物、R Lタテ、磨滅、波状口縁		G036
5	12	II A-49	III	深鉢	III-1	口縁	沈線施文の際の粘土のはみ出し顕著、R Lタテ	口径：22.5cm、残存率14%	G003
5	13	I R-53	I	深鉢	III-1	口縁	沈線、磨滅、R Lタテ (口縁上部) R Lヨコ (口縁下部)、波状口縁		G008
5	14	I T-48	III	深鉢	III-1	口縁	沈線、円形刺突、L Rヨコ、波状口縁		G029
5	15	I R-53	I	深鉢	III-1	胴部	沈線文、沈線間磨滅、R Lタテ	5-13と同一か	G011
5	16	I R-53	I	深鉢	III-1	胴部	沈線、R Lタテ、磨滅	5-15と同一か	G018
5	17	II A-50	II	深鉢	III-1	胴部	沈線、外面炭化物、R Lタテ・ヨコ、磨滅	5-18と同一か	G033
5	18	II A-50	II	深鉢	III-1	胴部	沈線、外面炭化物、R Lタテ・ヨコ、磨滅		G034
5	19	I R-52	I	深鉢	III-1	胴部	R Lタテ、沈線、沈線間磨滅		G052
6	20	I S-53	II	深鉢	III-1	口縁	波状口縁、粘土紐貼付、沈線L Rヨコ		G042
6	21	I Q-68	II	深鉢	III-2	口縁	波状口縁、粘土紐貼付 (剥落)		G044
6	22	I Q-68	II	深鉢	III-2	口縁	波状口縁の波頂部粘土紐貼付 (剥落)		G043
6	23	I R-63	I	深鉢	III-2	口縁	波状口縁、粘土紐貼付、沈線		G006
6	24	I R-60	I	深鉢	III-2	胴部	沈線、内面炭化物		G057
6	25	I S-63	I	深鉢	III-2	口縁	波状口縁、沈線 (楕円状)		G041
6	26	I S-64	II	深鉢	III-2	口縁	波状口縁、沈線 (楕円状)		G009
6	27	I R-60	I	深鉢	III-2	口縁	沈線、粘土紐貼付		G005
6	28	I O-68	II	深鉢	III-2	口縁	波状口縁、沈線→ミガキ		G004
6	29	試掘	—	深鉢	III-2	口縁	波状口縁、沈線、外面炭化物	口径：16～17cm	G063
6	30	試掘	—	壺?	III-2	胴部	沈線 (蛇行状)、内面炭化物		G055
6	31	I Q-63	I	鉢?	III-2	口縁	沈線		G021
6	32	試掘	—	深鉢	III-2	口縁	沈線、網目状沈線		G056

表1 出土土器観察表

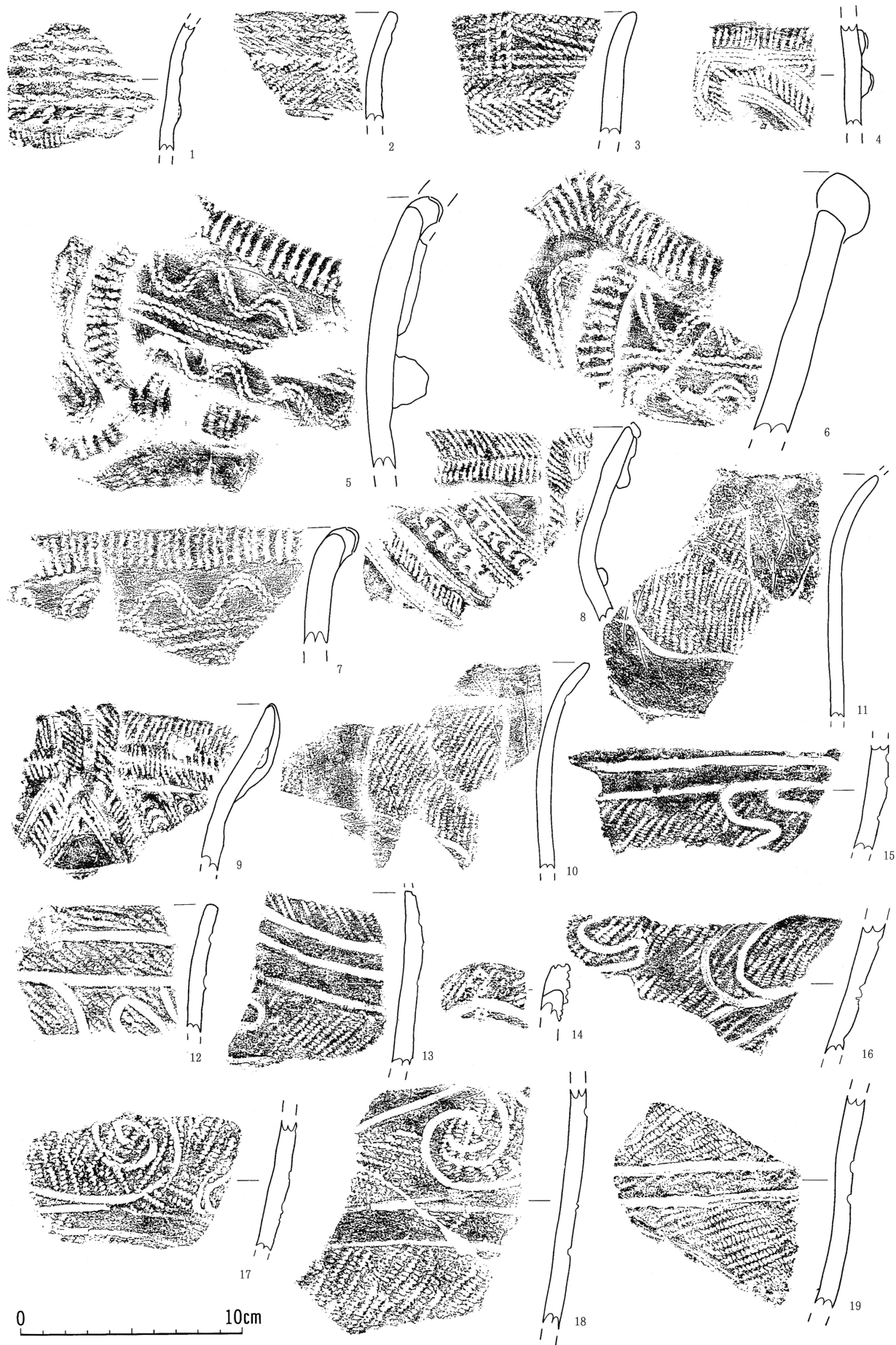
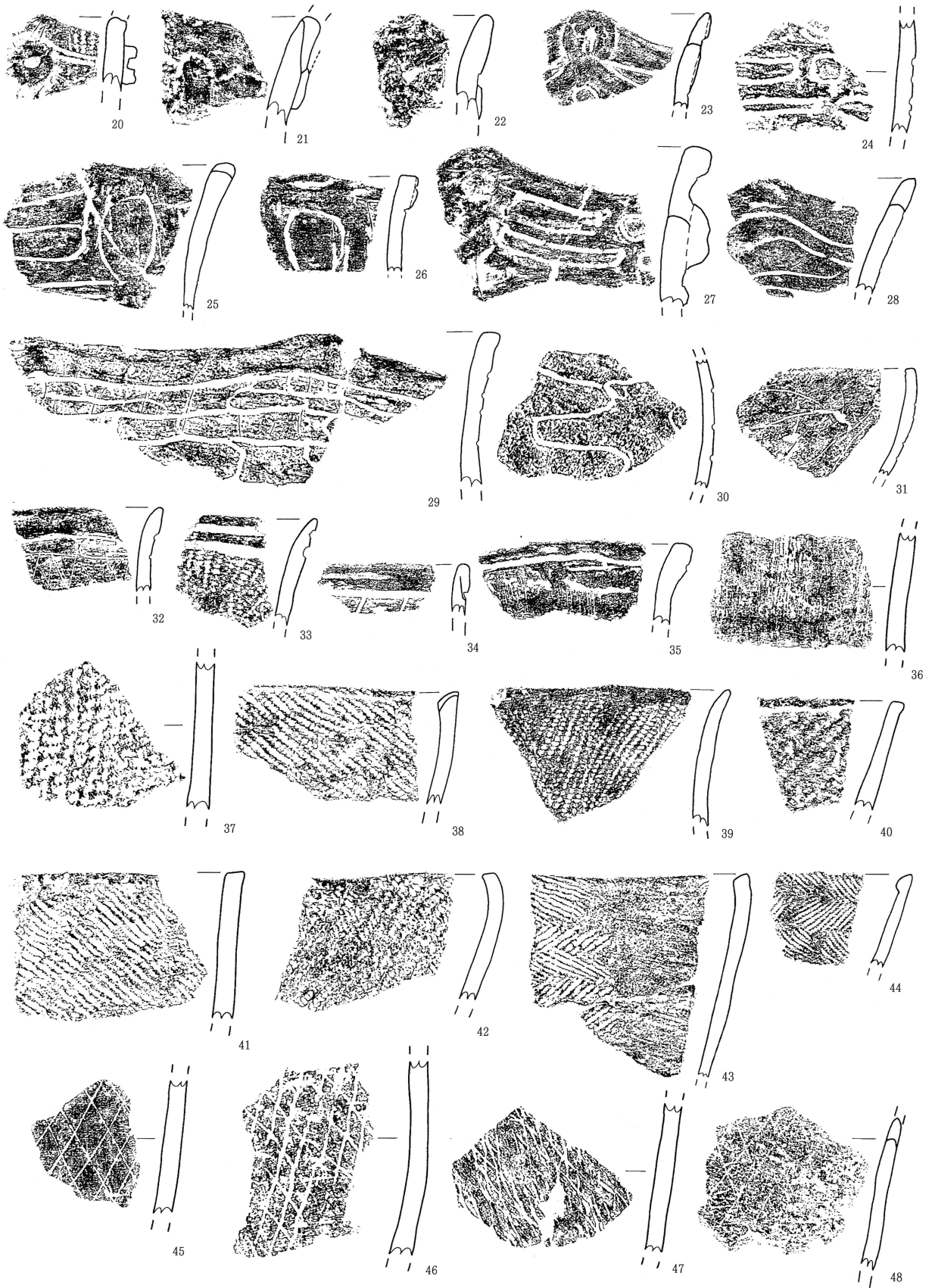


图5 出土土器(1)



0 10cm

图6 出土土器(2)

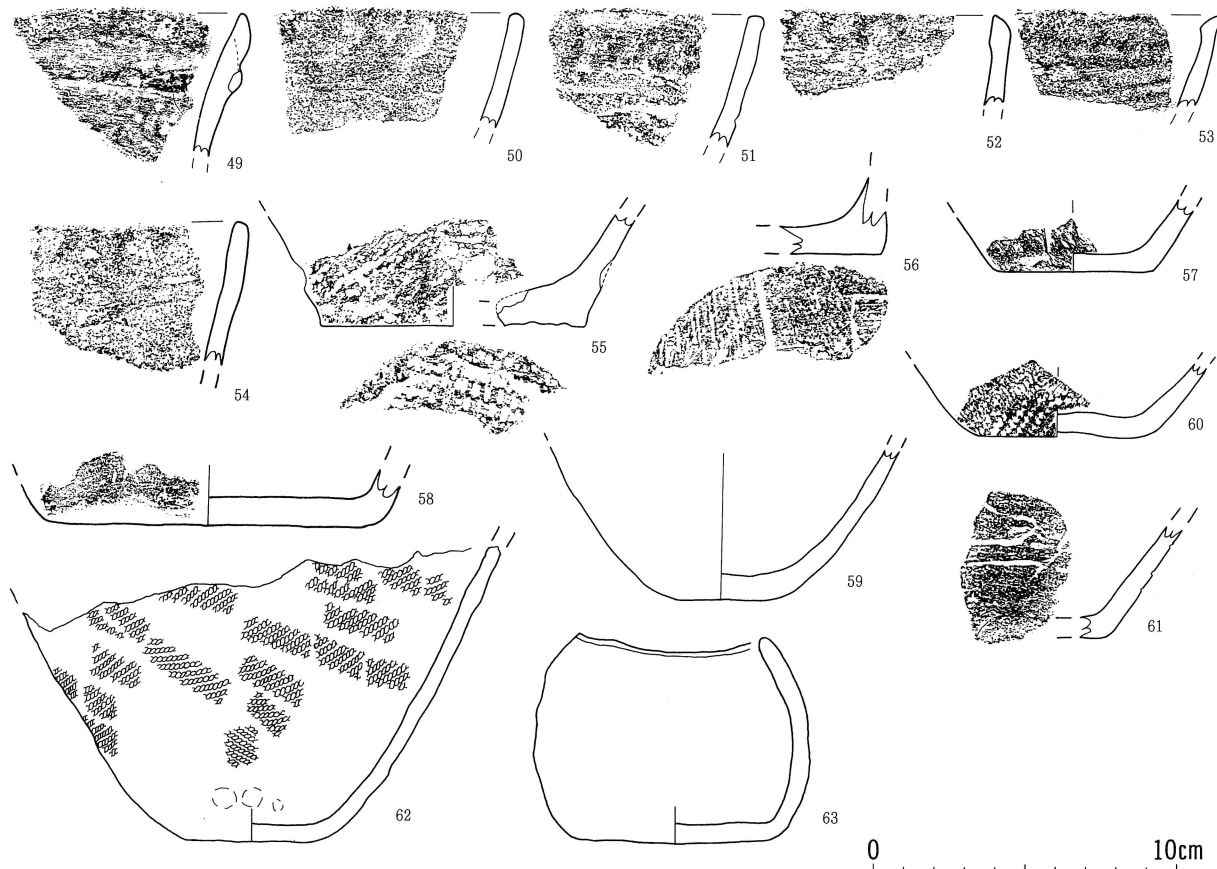


図7 出土土器(3)

図	No.	出土位置	層	器形	分類	部位	文様など	備考	整理番号
6	33	I J-49	I	深鉢	IV	口縁	沈線、RLナナメ・タテ、粗砂粒多量		G014
6	34	I Q-64	I	深鉢	IV	口縁	折り返し状口縁、沈線(網目状?)		G030
6	35	I R-65	II	深鉢	IV	口縁	沈線、口縁肥厚、櫛状工具によるタテの調整(条痕?) 外面ミガキ顕著	6-36と同一か	G007
6	36	I R-65	II	深鉢	IV	胴部	櫛状工具によるタテの調整、外面炭化物		G053
6	37	試掘	—	深鉢	IV	胴部	RLRナナメ?		G062
6	38	I P-60	I	深鉢	IV	口縁	口唇部貼付→面取り、外面炭化物、LRタテ		G048
6	39	II S-46	I	深鉢	IV	口縁	RLタテ、内面帯状炭化物、口唇面取り	口径: 18.4cm、残存率14%	G010
6	40	I P-63	III	深鉢	IV	口縁	RLタテ、海綿骨針多量		G015
6	41	試掘	—	深鉢	IV	口縁	L ↓ ↑ タテ、外面炭化物		G061
6	42	試掘	—	深鉢	IV	口縁	LRヨコ、内外面炭化物、口縁内湾		G058
6	43	I P-60	I	深鉢	IV	口縁	口唇部面取り、外面炭化物、羽状縄文(L ↓ ↑, R ↓ ↑)	口径: 25cm	G047
6	44	I Q-64	I	深鉢	IV	口縁	羽状縄文(LR, RL)、磨滅		G013
6	45	I S-53	I	深鉢	III-2	胴部	網目状沈線		G049
6	46	試掘	—	深鉢	III-2	胴部	網目状燃糸文(R ↓ ↑)、外面炭化物		G054
6	47	I T-48	III	深鉢	III-2	胴部	網目状燃糸文(R ↓ ↑)、外面炭化物		G050
6	48	I S-53	I	深鉢	III-2	口縁	網目状沈線、磨滅著しい		G031
7	49	II S-47	III	深鉢	IV	口縁	粘土紐貼付、磨滅著しい		G016
7	50	I S-59	I	深鉢	IV	口縁	外面指頭圧痕明瞭、炭化物付着		G017
7	51	I S-59	I	深鉢	IV	口縁	外面指頭圧痕明瞭		G019
7	52	II A-48	III	深鉢	IV	口縁	無文、外面炭化物、指頭圧痕明瞭		G045
7	53	II H-48	III	深鉢	IV	口縁	外面指頭圧痕明瞭		G020
7	54	II A-48	III	深鉢	IV	口縁	無文、外面炭化物、指頭圧痕		G046
7	55	II T-43	II	深鉢	IV	底部	L ↓ ↑ ヨコ、網代痕	底径: 8.8cm	G024
7	56	II A-48	III	深鉢	IV	底部	木葉痕、外面ヨコ方向のナデ調整		G040
7	57	II T-44	II	鉢?	IV	底部	RLヨコ?	底径: 5.4cm	G022
7	58	II B-45	III	深鉢	IV	底部	無文、海綿骨針含む	底径: 10cm	G039
7	59	I P-61	II	鉢?	IV	底部	無文、内外面整形時の指頭圧痕明瞭	底径: 2cm	G025
7	60	II A-65	I	鉢?	IV	底部	LRヨコ	底径: 5.2cm	G023
7	61	I Q-63	I	鉢	III-2	底部	沈線、外面赤彩	底径: 不明	G032
7	62	I P-61	II	深鉢	IV	底部	LRヨコ・ナナメ、指頭圧痕、粘土積み上げの凸凹明瞭	底径: 4.0cm	G002
7	63	I P-61	II	鉢?	IV	略完形	無文、外面磨滅著しい	口径: 6.2cm、器高: 6.8cm、底径: 6.0cm	G001

表2 出土土器観察表

2 石器 (図8～10、表3)

石器、剥片類が計53点出土した。

I群1類 石鏃 (1～10)

- a : 無茎のもの (1～6) 基部が抉れているもの、直線的なものがある。6は側縁部全体に微細な剥離を施している。
- b : 有茎のもの (8～10) 3点とも、先端部が鋭角に欠損している。

2類 石匙 (11・12)

- a : 横形のもの (11)
- b : 縦形のもの (12) 刃部に使用によるとみられる、欠損・磨耗が確認できる。

3類 石錐 (16) 先端部に磨耗が見られる。

4類 不定形石器 (13～15、17～25)

ここでは、二次加工剥片の中で一定の箇所調整を施したものを一括した。

器体の三側縁に刃部を作出するもの (13・19)、二側縁に刃部を作出するもの (14・15・17など)、一側縁に刃部を作出するもの (18・23など) がある。13・15は片面からの角度のある刃部調整である。18は石錐の欠損品か。

II群1類 擦石・敲石・凹石 (27～34)

- a : 側面に擦り痕がみられるもの (28・29)
- b : 側面・端部に擦り痕がみられるもの (30)
- c : 側面に擦り痕、端部に敲き痕がみられるもの (27・33)
33は側面擦りの後、連続的な敲打により、全体を整形している。
- d : 中央部に擦り痕がみられるもの (32)
32は表面全体を擦っており、器体のほぼ中央部に表裏計4箇所の窪みがある。

2類 砥石 (34) 欠損品が1点出土した。

III群1類 磨製石斧 (26) 欠損品が1点出土した。器表面の剥落は、後世のものと思われる。

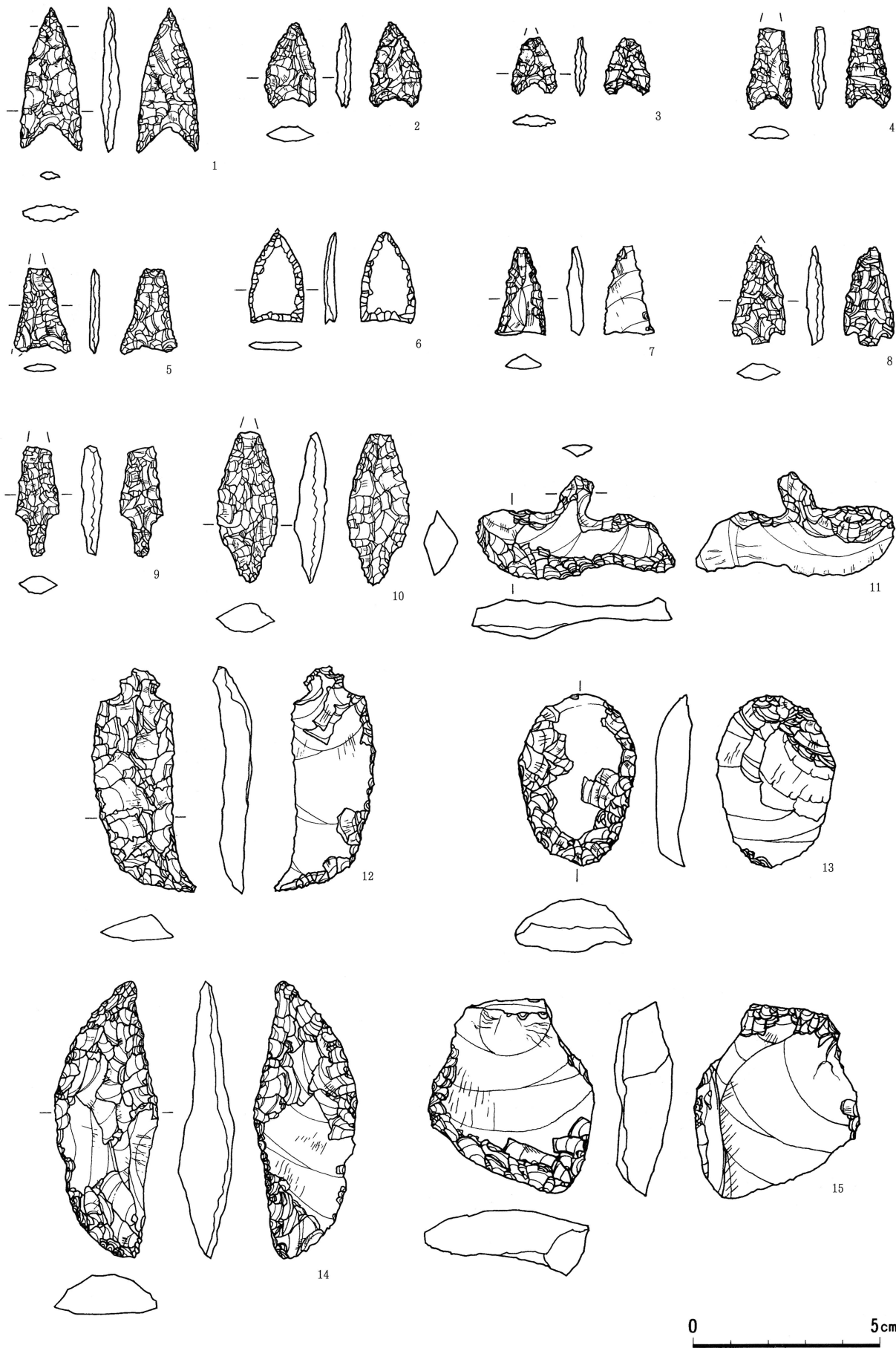


图8 出土石器(1)

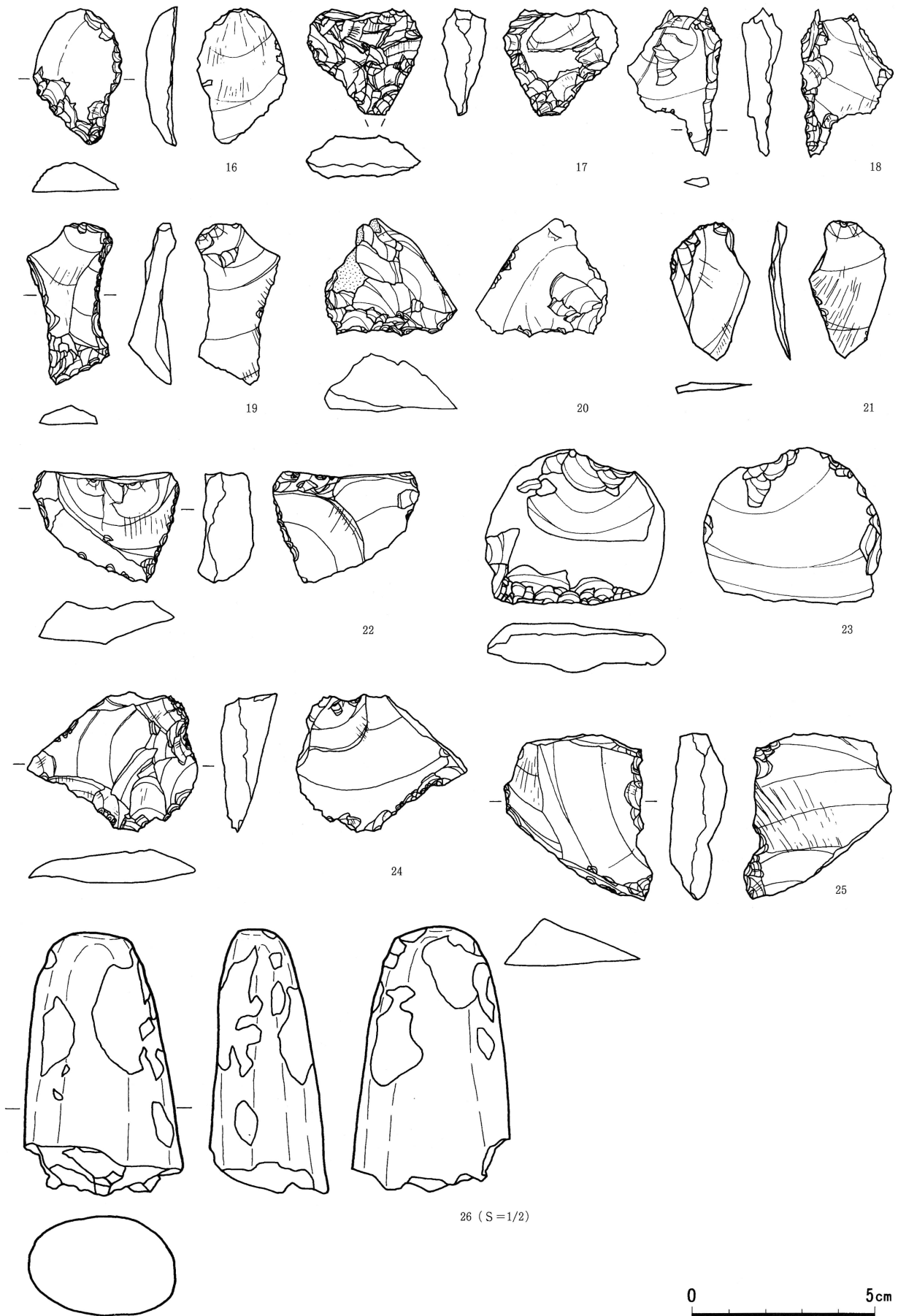


图9 出土石器(2)

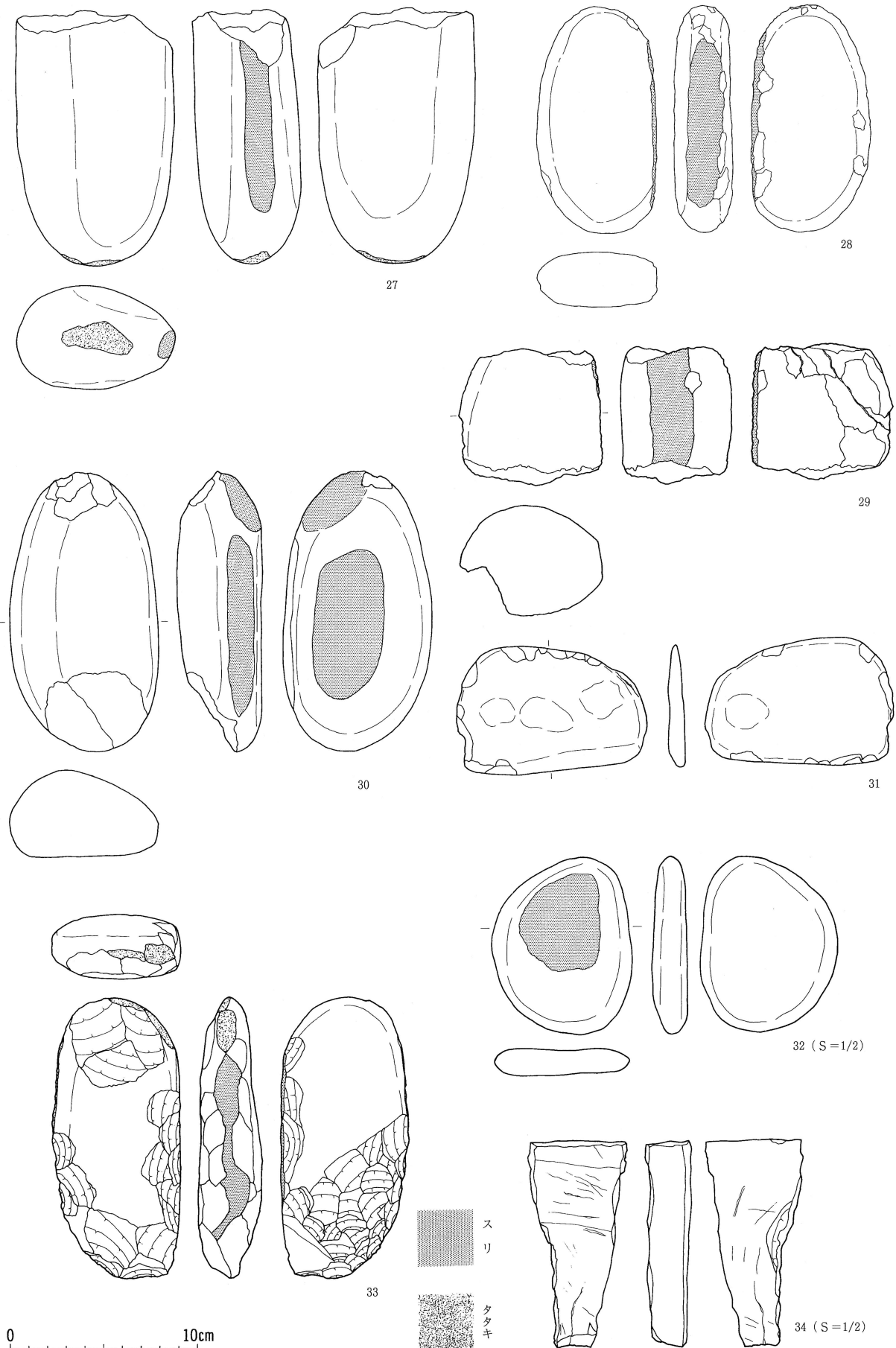


図10 出土石器(3)

図版	番号	出土位置	層位	器種	分類	長さ: mm	幅: mm	厚さ: mm	重さ: g	石質	備考	整理番号
8	1	Ⅱ T-43	Ⅱ	石鏃	I-1	39.5	16.5	4.7	23.2	珪質頁岩		GS-04
8	2	I R-65	Ⅱ	石鏃	I-1	23.1	13.5	4.1	1.3	珪質頁岩		GS-09
8	3	I P-60	I	石鏃	I-1	(15.5)	12.5	2.9	(0.4)	珪質頁岩	先端部欠損	GS-03
8	4	I R-63	I	石鏃	I-1	(22)	12	2.9	(0.8)	珪質頁岩	先端部欠損	GS-06
8	5	I Q-63	I	石鏃	I-1	(23)	(15)	2.2	(0.7)	珪質頁岩	先端部欠損	GS-18
8	6	I O-66	Ⅱ	石鏃	I-1	(24.2)	15	2.1	(1.0)	珪質頁岩		GS-19
8	7	I Q-64	Ⅱ	石鏃	I-1	(24)	13.1	4.3	(1.2)	珪質頁岩	先端部欠損	GS-08
8	8	I P-60	I	石鏃	I-1	(32.8)	14	4.4	(1.3)	珪質頁岩	先端部欠損	GS-17
8	9	I R-64	I	石鏃	I-1	(29.8)	11.5	50.4	(1.9)	珪質頁岩	先端部欠損	GS-14
8	10	試掘	—	石鏃	I-1	(40.3)	16	7.6	(41)	珪質頁岩	先端部欠損	GS-16
8	11	I P-60	I	石匙	I-2	(28)	53.5	10.0	(8.8)	玉髓質珪質頁岩		GS-10
8	12	Ⅱ S-27	Ⅲ	石匙	I-2	60	22	6.4	11.2	珪質頁岩	刃部欠損・磨耗	GS-01
8	13	I R-65	I	不定形石器	I-4	46.3	32.0	9.6	17.3	玉髓質珪質頁岩		GS-13
8	14	I Q-64	Ⅱ	不定形石器	I-4	74.3	28.2	13.7	22.3	珪質頁岩		GS-07
8	15	I Q-63	I	不定形石器	I-4	52.4	54.5	14.3	35.3	珪質頁岩		GS-26
9	16	I P-60	I	石錐	I-3	37.4	23.9	7.6	7.2	珪質頁岩		GS-02
9	17	Ⅱ T-45	Ⅱ	不定形石器	I-4	(29)	31.5	10.1	8.4	玉髓質珪質頁岩		GS-27
9	18	I S-65	Ⅲ	不定形石器	I-4	47.3	25.1	11	5.9	珪質頁岩	石錐か?	GS-12
9	19	I Q-64	I	不定形石器	I-4	44.5	23.0	8.7	6.1	珪質頁岩		GS-29
9	20	I R-63	I	不定形石器	I-4	32.2	36.2	16.1	13.4	玉髓質珪質頁岩		GS-11
9	21	I R-65	I	不定形石器	I-4	37.5	22.6	2.0	2.3	珪質頁岩		GS-20
9	22	I P-65	I	不定形石器	I-4	30.2	40.0	12.0	13.6	珪質頁岩		GS-28
9	23	I P-64	I	不定形石器	I-4	42.1	48.2	18.3	24.7	珪質頁岩		GS-15
9	24	Ⅱ S-48	Ⅲ	不定形石器	I-4	38.2	46.3	13.4	17.8	珪質頁岩		GS-25
9	25	I Q-60	I	不定形石器	I-4	45.5	50.2	15.1	20.3	珪質頁岩		GS-21
9	26	試掘	—	磨製石斧	Ⅲ-1	(72)	43.0	30.0	132.1	緑色細粒凝灰岩		GS-35
10	27	試掘	—	敲磨器	Ⅱ-1	138.7	79.0	55.0	1069.1	閃緑岩		GS-31
10	28	I R-69	Ⅱ	敲磨器	Ⅱ-1	122.0	64.3	30.1	392.4	閃緑岩		GS-05
10	29	試掘	—	敲磨器	Ⅱ-1	74.0	76.0	59.5	427.8	流紋岩		GS-33
10	30	I Q-65	I	敲磨器	Ⅱ-1	151.0	70	45.5	812.1	安山岩		GS-30
10	31	試掘	—	敲磨器	Ⅱ-1	69.0	101.8	11.0	111.3	安山岩		GS-32
10	32	試掘	—	敲磨器	Ⅱ-1	63.2	50.1	9.6	31.1	凝灰岩		GS-23
10	33	試掘	—	敲磨器	Ⅱ-1	150.0	68.0	33.6	507.6	閃緑岩		GS-34
10	34	I R-64	I	砥石	Ⅱ-2	(73.5)	(35)	13.5	(43.9)	細粒凝灰岩		GS-22

表3 出土石器観察表

3 銭貨 (図11、表4)

1は寛永通寶で試掘部分から出土した。いわゆる「古寛永」と思われる。2は、ⅡA-38～ⅡC-40内で確認した溝状遺構の底面から出土した(写真4)。「大日本」の文字と菊の紋が確認でき、明治時代以降のものと思われる。

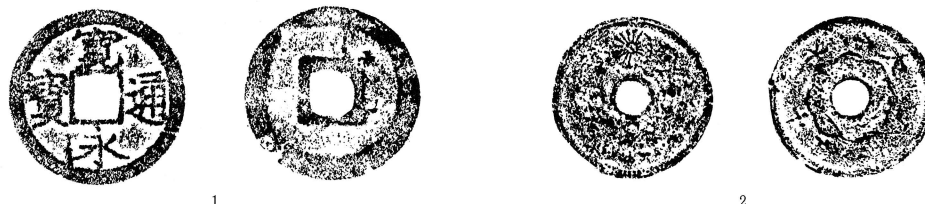


図11 銭貨

図版	番号	出土位置	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
11	1	試掘	—	2.3	—	01	3.8	
	2	ⅡA-39	底面	2.1	—	01	4.0	

表4 銭貨観察表

第Ⅲ章 まとめ

今回の調査では、縄文時代前期後葉から後期の土器片、石鏃・石匙などの石器が出土したが、縄文時代の遺構は検出されず、本遺跡はキャンプサイト地的な遺跡と思われる。しかし、前述したとおり下馬坂遺跡の所在する場所は、山からの岩塊流による崖錐性堆積物により、一次的な火山灰層はなく、火山灰層が攪乱された状態であるといえる。このことから、縄文時代の遺構が存在したとしても、崖錐性堆積物の攪乱により確認できる状態ではなくなった可能性はある。また、調査区南側の沢に向かう斜面地の試掘を行い、比較的まとまった縄文土器、石器の出土があった。規模は不明だが、いわゆる“捨て場”の可能性はある。

<引用・参考文献>

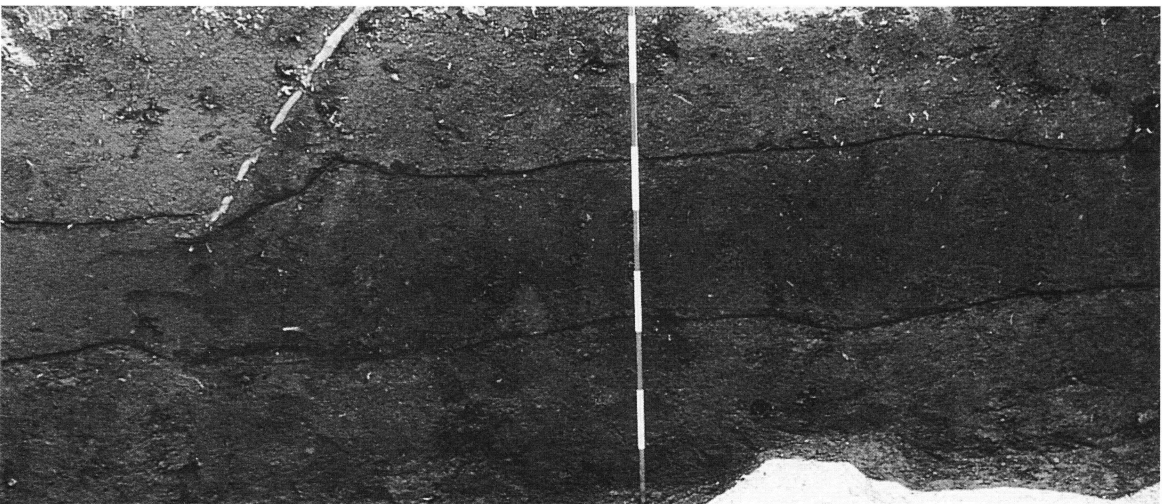
青森県教育委員会	1987	『大石平遺跡Ⅲ』	青森県埋蔵文化財調査報告書第103集
青森県教育委員会	1986	『大石平遺跡Ⅱ』	青森県埋蔵文化財調査報告書第97集
青森県教育委員会	1984	『弥栄平(2)遺跡』	青森県埋蔵文化財調査報告書第81集
青森県教育委員会	1983	『銅屋(1)遺跡』	青森県埋蔵文化財調査報告書第75集
青森県教育委員会	1982	『見知川山遺跡』	青森県埋蔵文化財調査報告書第71集
青森県教育委員会	1998	『隈無(1)遺跡・隈無(2)遺跡・隈無(6)遺跡』	青森県埋蔵文化財調査報告書第237集
青森県教育委員会	1998	『根の山遺跡』	青森県埋蔵文化財調査報告書第228集
青森県教育委員会	1998	『幸畑(4)遺跡・幸畑(1)遺跡』	青森県埋蔵文化財調査報告書第236集
青森県教育委員会	1986	『上尾鮫(2)遺跡Ⅱ』	青森県埋蔵文化財調査報告書第115集
青森県教育委員会	1982	『牛ヶ沢(3)遺跡』	青森県埋蔵文化財調査報告書第86集
青森県教育委員会	1983	『沖附(2)遺跡』	青森県埋蔵文化財調査報告書第101集
八戸市教育委員会	1986	『丹後谷地遺跡』	八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集



基本層序A-B（西から）



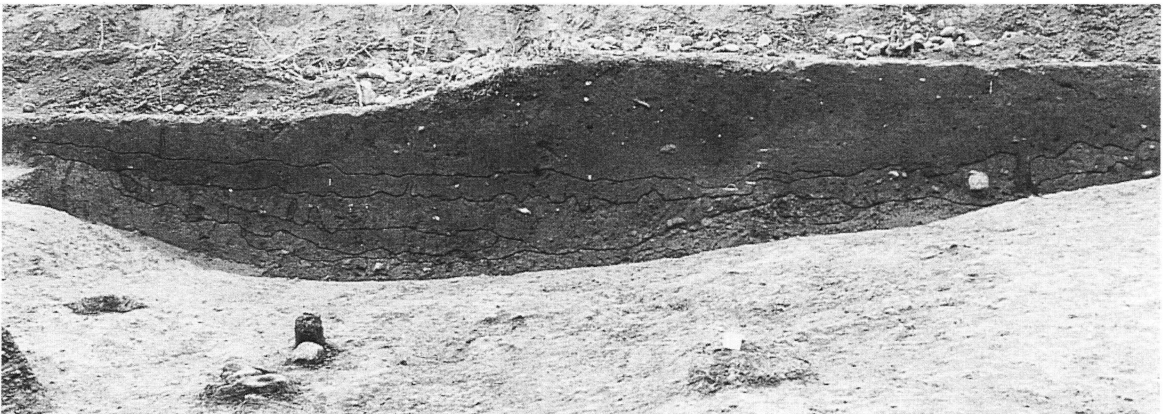
基本層序C-D（南から）



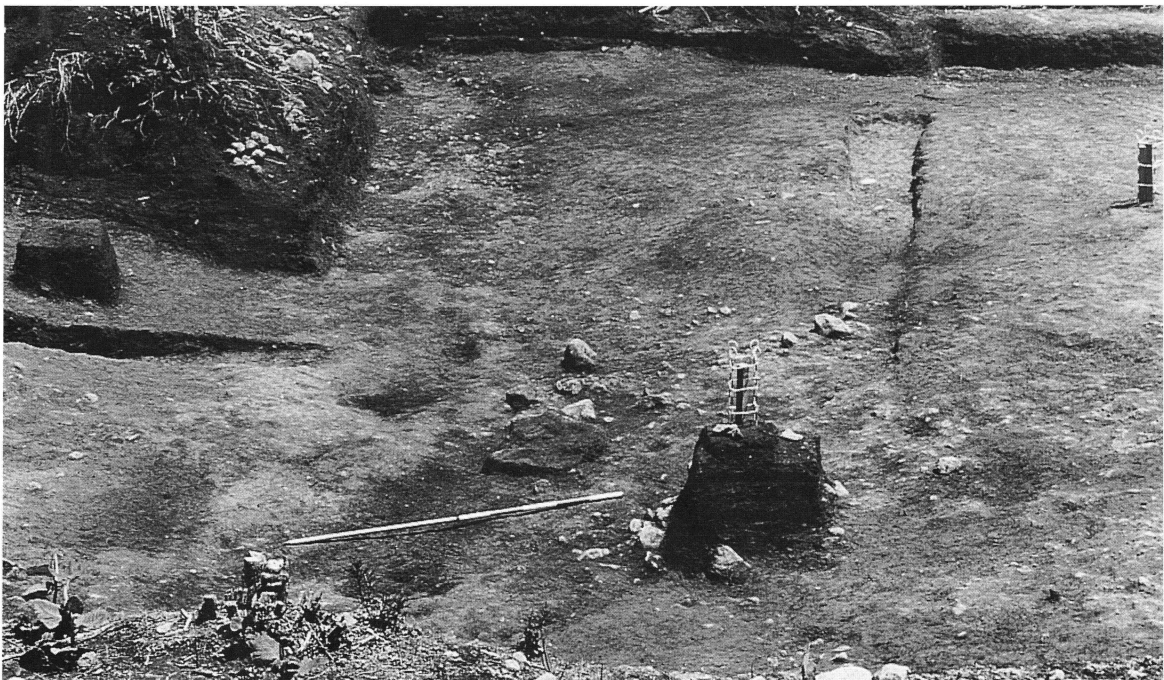
調査区南端K-L（北から）



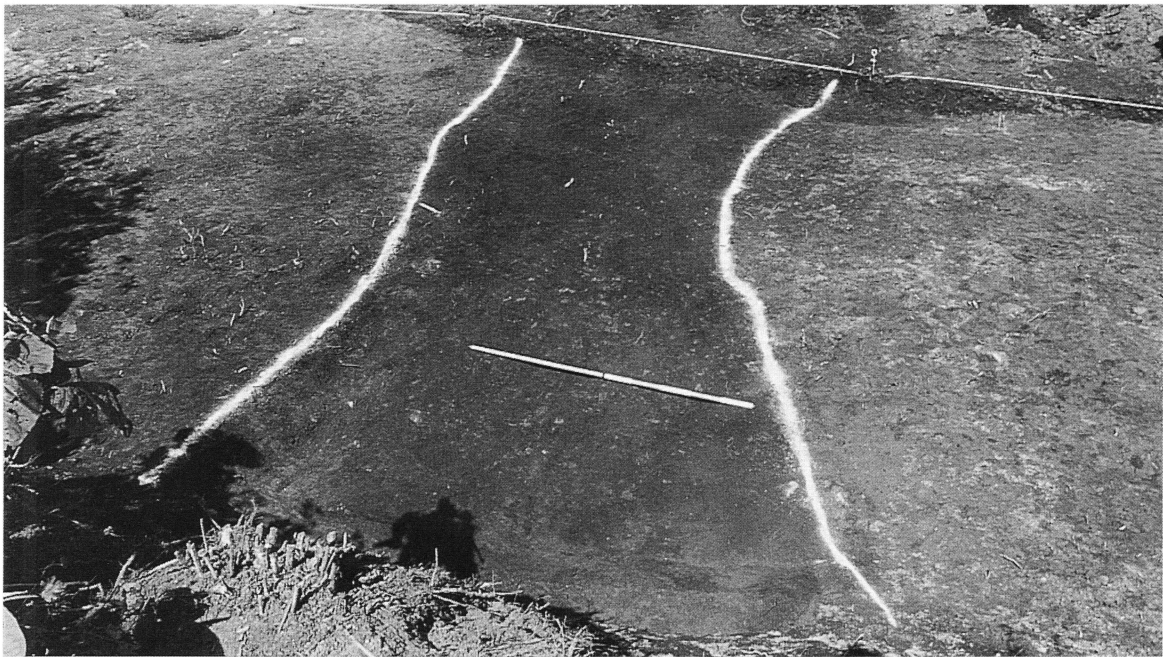
沢地形 1 確認 (西から)



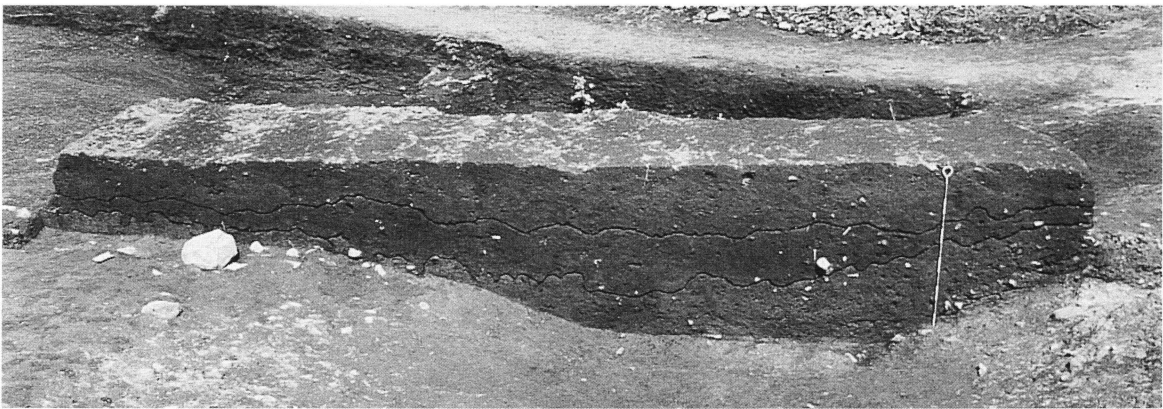
沢地形 1 セクションE-F (東から)



沢地形 1 完掘 (西から)



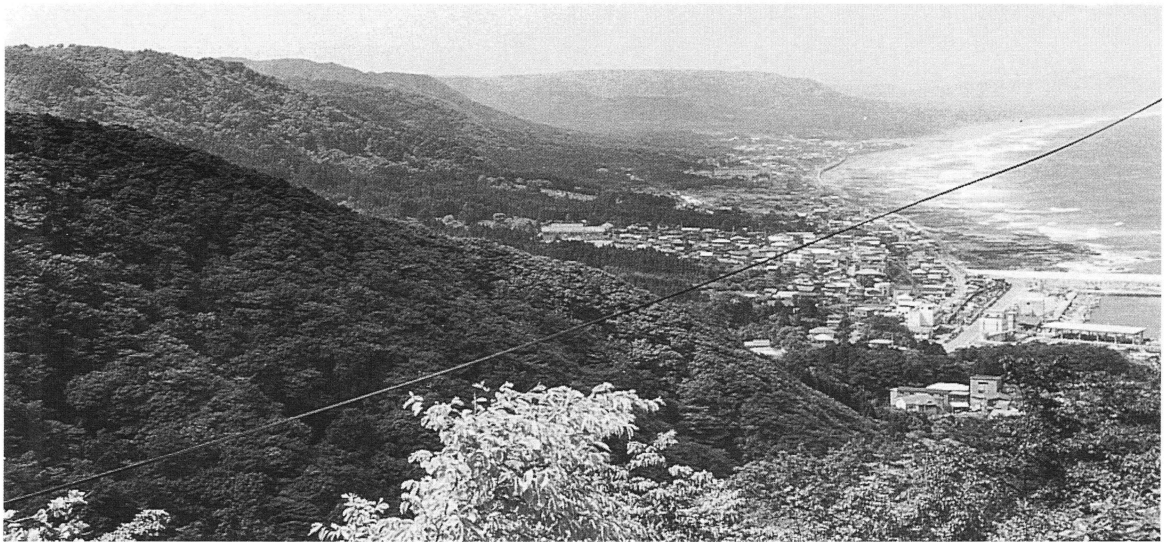
沢地形 2 確認 (西から)



沢地形 2 セクションG-H (西から)



沢地形 2 完掘 (西から)



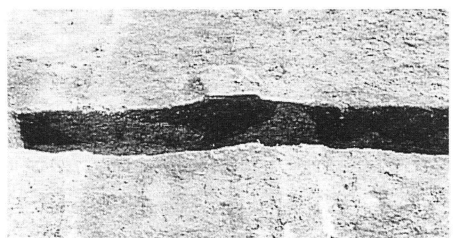
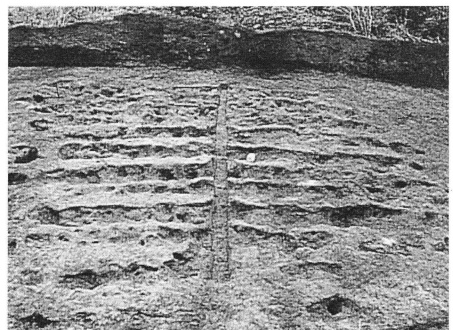
遺跡遠景（南から）



調査区北側（南西から）



調査区全景（南から）



溝状遺構完掘（西から）、セクション（南から）

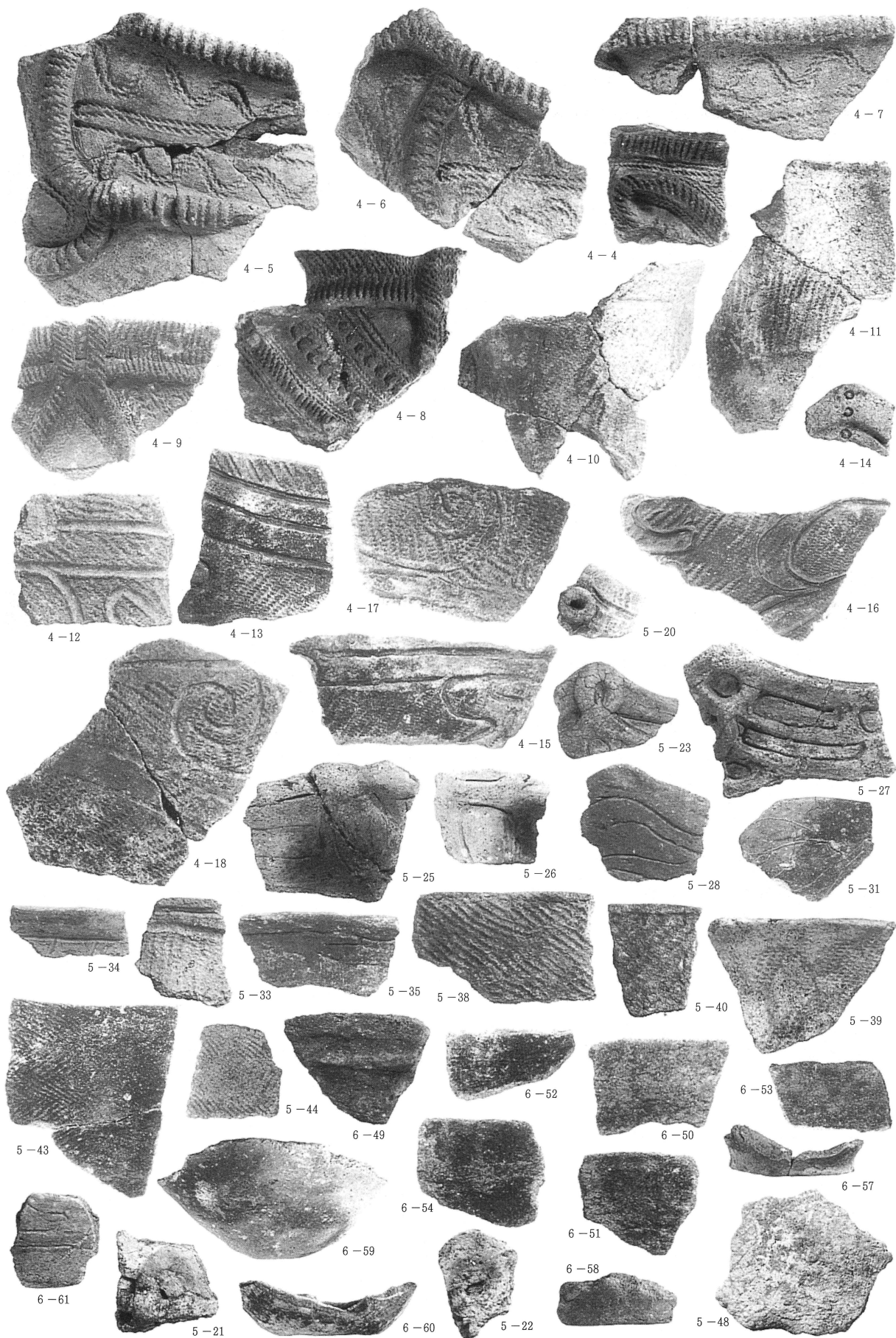


写真 5

S=2/5

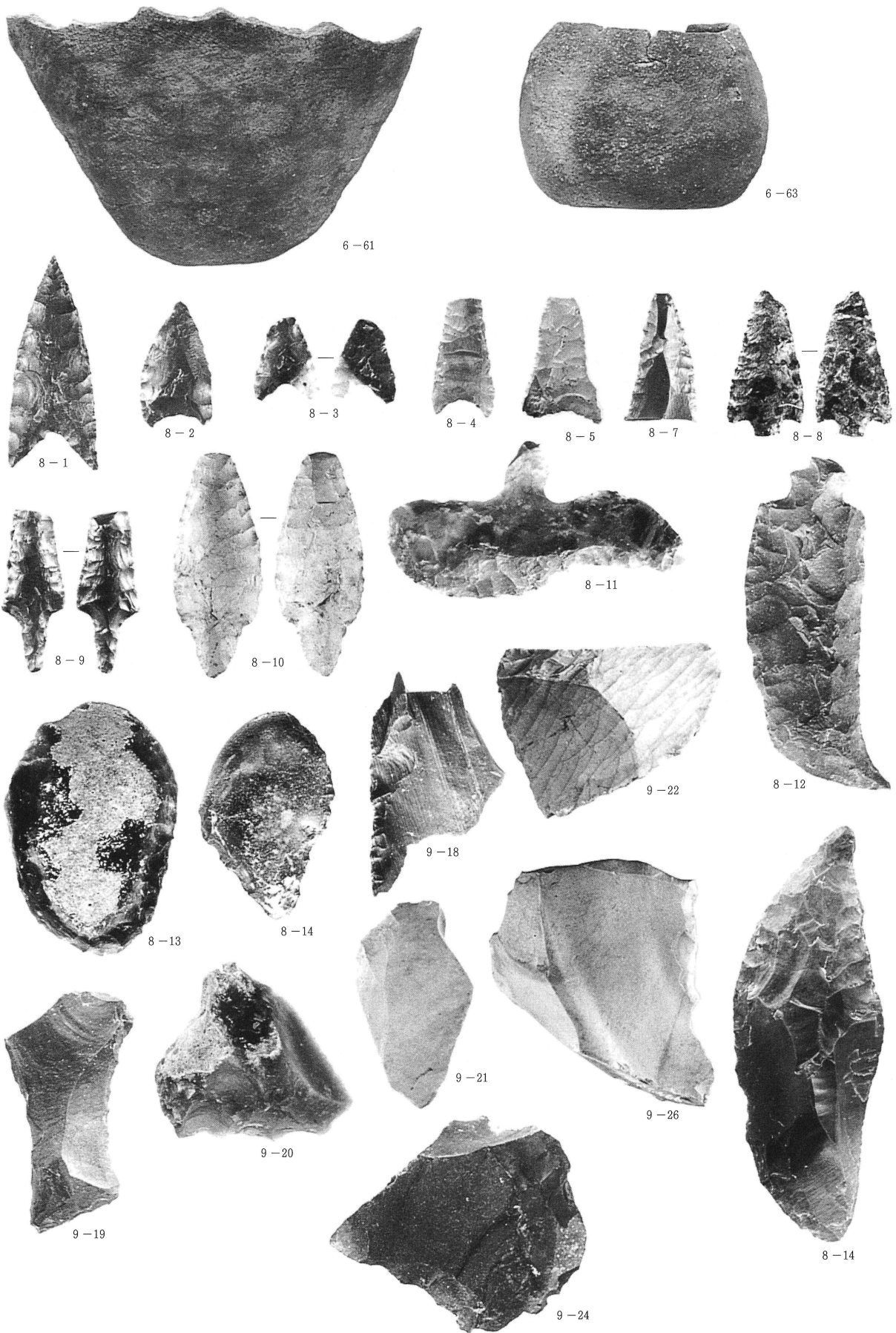


写真 6

6-61・63 S=1/2、他はS=1/1



10-23・25 ————— S=1/1
 9-27 ————— S=1/2
 10-29・33・35 ————— S=1/3
 その他 ————— S=1/3

写真 7

報告書抄録

ふりがな	げばさかいせきはくつちようさほうこくしょ							
書名	下馬坂遺跡発掘調査報告書							
副書名	国道338号道路改良事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第253集							
編著者名	三林 健一							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15 TEL(0177)88-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	1999（平成11）年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
げばさかいせき 下馬坂遺跡	あおもりけんしもきたぐん 青森県下北郡 ひがしどおりむらおおあざ 東通村大字 しらぬかあざげばさか 白糠字下馬坂 152-2、外	02-424	54045	41° 7' 59"	141° 23' 31"	97・05・01 ～07・03	4,200m ²	国道338号 道路改良 事業に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
下馬坂遺跡	散布地	縄文時代 近代	溝状遺構	縄文土器 石器 銭貨		なし		

青森県埋蔵文化財調査報告書 第253集

下馬坂遺跡

—国道338号道路改良事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 1999年3月25日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15

TEL 0177-88-5701、FAX 0177-88-5702

印刷所 不二印刷工業株式会社

〒030-0902 青森市合浦一丁目10番16号

TEL 0177-41-5439、FAX 0177-41-2541

